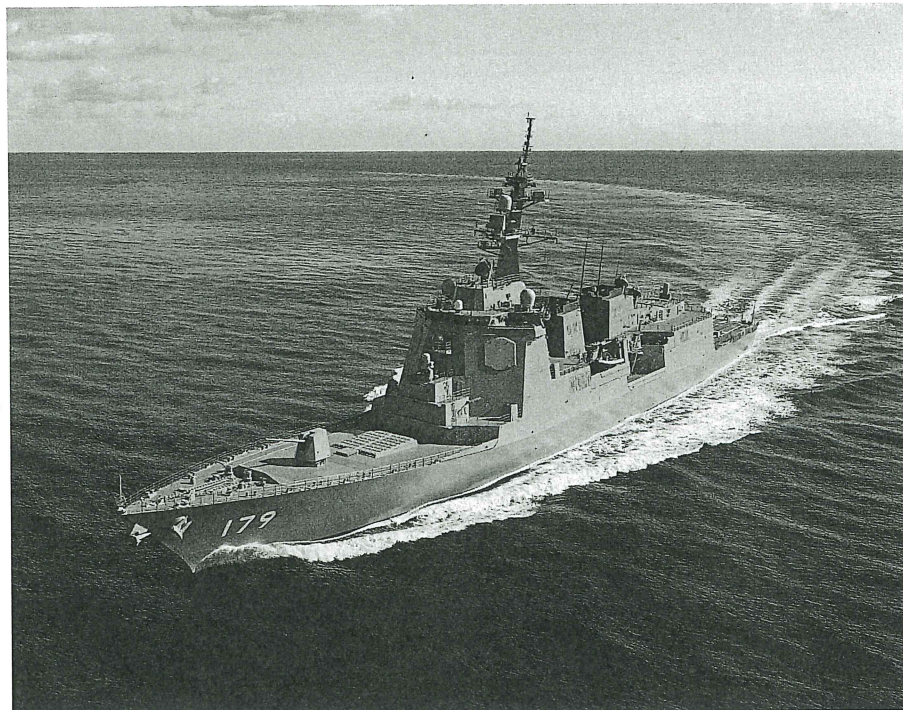


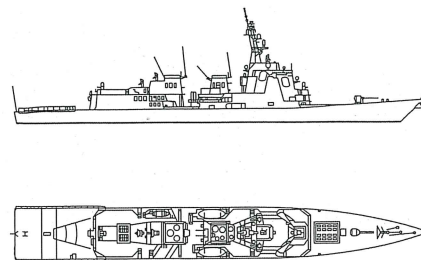
護衛艦「まや」型 (DDG「MAYA」 Class)



DDG	179「まや」	27年度
DDG	180「はぐろ」	28年度

「あたご」型護衛艦をベースに性能を向上させた対空ミサイル艦。最新のイージスシステム「ベースライン9」を備え、日米で共同開発された最新型弾道ミサイル防衛用誘導弾SM-3ブロックII Aを発射することが可能。海自のイージス艦で、就役時から弾道ミサイル防衛 (BMD) 能力を持つのは初めて。

対空戦闘用の精密データリンクによる**共同交戦能力 (CEC)**にも海自艦艇として初めて対応。これにより、敵ミサイルなどの目標情報を、同じくCECを備える他の艦



艇や航空機とリアルタイムで共有することが可能となっている。

主機には「あさひ」型と同じ、ガスタービンと電気推進を併用する「COGLAG」方式を採用し、ライフサイクルコストの低

減が図られている。

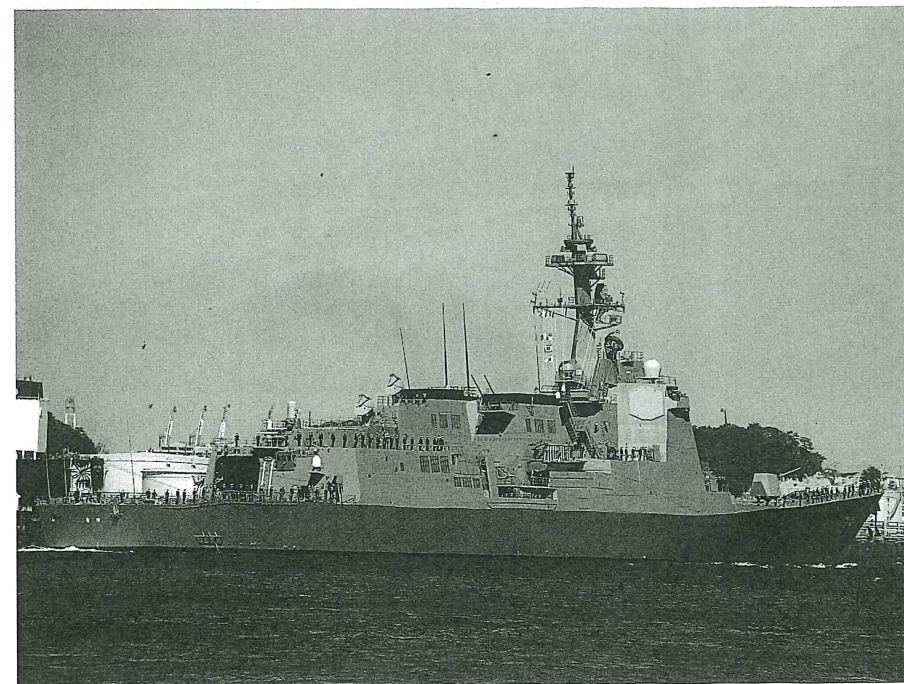
2番艦の「はぐろ」が令和3年3月に就役し、海自のイージス艦8隻体制が整った。

● 主要目

基準排水量 8,200t、長さ 170m、幅 21m、深さ 12m、吃水 6.2m、主機 COGLAG 方式ガスタービン 2基、推進電動機 2基 2軸、出力 69,000PS、速力約 30kt、乗員約 300人。

● 主要兵装

イージス装置一式、62口径5インチ砲×1、垂直発射装置 (VLS Mk41、スタンダード SAM、アスロック兼用) 一式、艦対艦ミサイル艦上装置一式、高性能 20 ミリ機関砲×2、3連装短魚雷発射管×2、SH-60K×1。



	● 建造所	● 起工	● 進水	● 竣工
「まや」	JMU横浜	平29. 4. 17	平30. 7. 30	令2. 3. 19
「はぐろ」	JMU横浜	平30. 1. 23	令1. 7. 17	令3. 3. 19

E-2D 早期警戒機



● 諸 元

乗 員	5人
機 体	
・全 幅	24.6m
・全 長	17.6m
・全 高	5.6m
・制 作	米国 ノースロップグラマン社
エンジン	2基
・名 称	T-56-A-427A
・出力	5,100HP/1基
・型 式	ターボプロップ・エンジン
・制 作	英国 ロールスロイス社

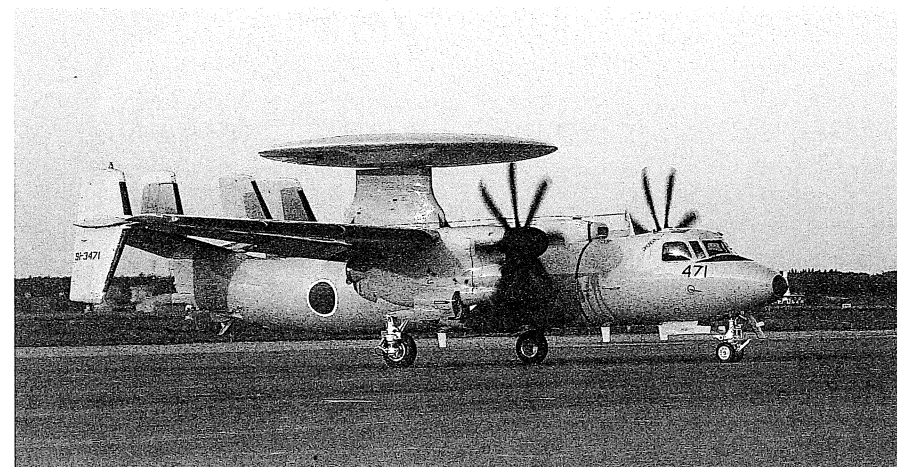
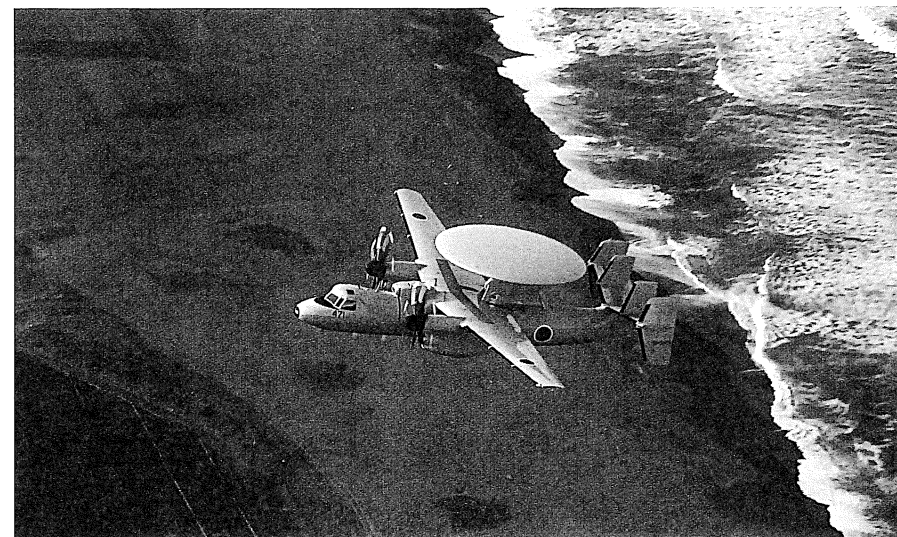
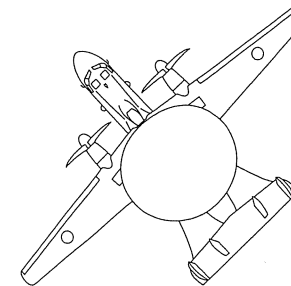
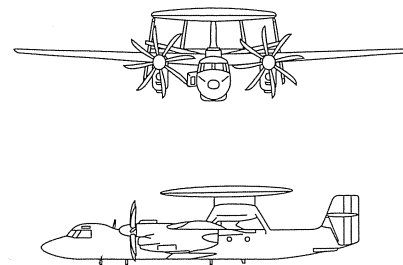
● 性 能

最大速度	345kt(約 650km/h)
巡航速度	260kt(約 500km/h)

● 備 考

広域において常続監視を行い、各種兆候を早期に察知するため、新たな早期警戒機を整備することとし、平成26年11月、E-2Dの取得を決定した。平成31年3月末、初号機を三沢基地に配備した。

搭載する捜索レーダーは、360°アンテナを回転する機械走査式と360°電子スキャンを行う電子走査式を併用し、高速及び高機動のレーダー有効反射面積が小さい目標まで探知可能であり、E-2Cと比べ高い警戒監視能力を有している。



米、中距離ミサイルを太平洋に配備へ



チャールズ・フリン司令官

米陸軍が中距離ミサイルを発射できる新型発射装置を、年内にアジア太平洋地域に配備する方針であることが分かった。米軍が地上発射型中距離ミサイルを新たに配備すれば、米口間の中距離核戦力（INF）全廃条約が締結された1987年以来初めてとなる。米太平洋陸軍のチャールズ・フリン司令官（陸軍大將）が3日、在日米大使館で朝日新聞など一部メディアの

米太平洋陸軍司令官 年内に

取材に応じ、明らかにした。フリン司令官は具体的な配備システムや時期、場所についての言及を避けつつ、中距離ミサイルを運用する米陸軍の能力に触れ、「中距離能力を持つ発射装置が、間もなく（アジア太平洋）地域に配備される」と述べた。配備を検討しているのは、米陸軍が開発・配備を進める地上発射型中距離ミサイルシステム「タイフーン」とみられ、射程1600^キ以上とされる巡航ミサイル「トマホーク」や、新型迎撃ミサイル「SM6」などが搭載できる。配備先の候補には日本も挙がるが、米政府関係者によれば、米グアムに配備している。

訓練などで日本に一時的に展開する案が有力だという。米軍はINF条約により地上配備型の中距離ミサイル（射程500～5500^キ）を保有してこなかったが、2019年に条約が失効したことで、米陸軍や海兵隊が新たな中距離ミサイルの開発・配備を本格化させている。

背景には中国のミサイル能力への危機感がある。防衛省幹部は「中国とのミサイル能力のギャップを埋めるものだ」とするなど抑止力への期待がある一方、ミサイルの開発・配備をめぐる軍拡競争につながりかねない。

（編集委員・佐藤武嗣）

出典：朝日新聞 2024年4月4日付

米軍、中距離ミサイル装置をフィリピンに展開 米比結束で中国を牽制

ワシントン＝ 清宮 涼 2024年4月16日 20時50分



7日、フィリピンのルソン島に到着した、中距離ミサイルの発射装置＝米太平洋陸軍提供 

米太平洋陸軍は15日、中距離ミサイルを発射できる新型の発射装置を、共同軍事演習の一環としてフィリピンに展開したと発表した。米口の中距離核戦力（INF）全廃条約の失効を受け、地上発射型の中距離ミサイル装置が配備される初の例となる。ミサイル開発・配備を進める中国への牽制（けんせい）が狙いで、米軍は「歴史的だ」と強調している。

日米比、初の首脳会談 米の「格子」戦略土台、対中国の枠組み重ねる →

米太平洋陸軍によると11日、ルソン島に発射装置を一時的に展開した。声明では「フィリピン軍と連携して相互運用性や即応性、防衛能力を高める上で画期的な節目になる」と強調した。発射装置には迎撃ミサイル「SM6」や巡航ミサイル「トマホーク」を搭載できる。

米軍は、共同軍事演習について「長年にわたる強固な米比同盟をさらに強める」と説明。11日には史上初の日米比首脳会談で、日本も含めた3カ国が、対中国を意識した幅広い防衛協力に合意したばかりだ。

米太平洋陸軍のチャールズ・フリン司令官は3日、朝日新聞などに対し、中距離ミサイルの発射装置を年内にアジア太平洋地域に配備する方針を示していた。米軍は今後の方針を明かしていないが、米グアムに配備する案が有力視されてきた。今後日本にも、訓練などで一時的に展開する可能性が指摘されている。

1987年に米口が締結したINF全廃条約で、地上配備型の中距離ミサイル（射程500～5500キロ）の保有や開発が禁じられてきたが、トランプ前米政権は2019年に離脱を表明し、条約は失効した。中国のミサイル能力への危機感を背景に、米軍は中距離ミサイルの開発を進めてきた。（ワシントン＝ 清宮 涼）

出典：朝日新聞デジタル 2024年4月16日付